

Catuhstava テキストの再検討

—— 注釈書を利用して ——

津 田 明 雅

1 はじめに

ブッダがこの世に生まれたのは一説では紀元前5世紀頃と考えられている。ブッダの悟りは説法という形で人々に伝えられ、その説法は彼の没後弟子たちによって經典としてまとめられていく。僧団も整備され、戒律が作られていった。僧団は紀元前3世紀頃からいくつもの部派へと分裂を始める一方で、出家者の集団として次第に一般社会とは切り離された存在となっていく、その結果ブッダの過度な神格化、在家信者の実質的な締め出し、といった大きな問題を生み出していく。そうした状況の中で、紀元前後には在家の仏教徒による大乘仏教運動が非常に盛んになる。大乘經典が制作、編集され始めるのもこの時期である。そのうちのいまだ続く紀元2,3世紀頃、ナーガールジュナ(Nāgārjuna)が現れる。彼は大乘經典の中でも特に『般若経』の影響を強く受け、従来の存在を範疇化していく区別の哲学を否定しながら、独自の「空」の思想を打ち立てていった。彼の弟子たちは後に中観派と呼ばれる一大学派を形成し、インドで仏教が減びるまで大きな影響力を保ち続けた。彼の著作とされるものには、空の思想の中核が述べられている *Mūlamadhyamaka-kārikā* (以下、MK) をはじめとして、*Yuktiśāṣṭika* や *Sūnyatasaptati*、ニヤヤー学派を批判した *Vigrahavyāvartanī* や *Vaidalyasūtra* などの哲学的、論理的なものがある一方で、王に宛てた書簡である *Suhṛtlekha* や *Ratnāvalī* など大乘仏教の実践を説いたものもある。本稿で扱う *Catuhstava* (以下、CS) も伝承では彼の著作とされており、その性格としては大乘の立場から仏を讃え歌うという実践的なものでありながら、内容的にMKと類似する部分を多く含んでおり、哲学的側面を併せ持ったものである。

CSの研究はChr. Lindtnerによる校訂テキストの出版¹⁾以降、際立った進展を見せていない。本稿執筆者は現在、東京大学所蔵のCSの注釈書の校訂を進めている。この注釈書からは従来の校訂本とは異なる読み及び解釈がいくつか回収されたので、それらのうち重要と思われるものを本稿後半部に報告したいと思う。また、CSはナーガールジュナ作とされる4つの讃歌から構成されているが、それら4つの讃歌が後代誰かの手によってCSとして1つにまとめられた可能性が高いと考えられる。しかしまとめられた年代やその経緯等はまだまだ明らかではないし、またチベットにCSとしてまとめたものが伝わっていた形跡がないのも問題である。本稿ではそうしたCSの成立の背景を押さえるべく、今までの研究史を前半部にまとめる。

2 研究史

CS研究の端緒はLouis de La Vallée Poussinの*Bodhicaryāvatāra-pañjikā* (以下、BCP)の校訂出版²⁾にある。この*Bodhicaryāvatāra*の注釈書には5つの偈頌が*catustave* (sic)として引用されている³⁾。de La Vallée Poussinはこれら5つの偈頌をチベット大蔵經に含まれる作品と比較し、ナーガールジュナ作とされる讃歌のうち2つの讃歌にそれらが含まれることを確認した。その2つは*Nirāṅpamya-stava* (以下、Ns, P⁴⁾ no. 2011)と*Lokātīta-stava* (以下、Ls, P no. 2012)である⁵⁾。氏はCSを、異なるタイトルをもった4つの讃歌の集まりだと考え、残り2つの讃歌を、チベット大蔵經でNsとLsの直後におかれており、同一の翻訳者⁶⁾によって訳されていることから、*Cittavajra-stava* (以下、Cs, P no. 2013)と*Paramārtha-stava* (以下、Ps, P no. 2014)だとした⁷⁾。

1930年代にG. TucciはNsとPsの注釈付きサンスクリット写本を入手し、本文である偈頌部分のみを校訂出版した⁸⁾。残りの2讃歌はこの写本には失われている (missing) とされているが、もともとCSとして4つの讃歌のそろった1つの写本であったのかどうかは不明である。氏はCSを構成する讃歌をde La Vallée Poussinと同じくNs, Ls, Cs, Psとし、形態 (style) がMKと同じこと、Candrakīrtiが*Prasannapādā* (以下、PP) でLsを*ācāryapādaiḥ*⁹⁾として引用していること、の2点から、CSはナーガールジュナの実作であると

した。また*Advayavajrasaṃgraha* (以下、AS) にもNsが引用されている¹⁰⁾ことを指摘している。

一方、P. Patel¹¹⁾はチベット大蔵經所収のナーガールジュナ作とされている諸讃歌の内容を検討し、NsとLs以外の残り2つの讃歌の確定を試みている。氏は第三の讃歌について、BCPにそれと似た讃歌がいくつか引用されていることと、それがCsやPsよりも、NsやLsに類似していることから、*Acintya-stava* (以下、As, P no. 2019) だとした。そして第四の讃歌については、Ns, Ls, Asと同様に中観の様々な理論を扱っていることから、チベット大蔵經でAsの直後にあって同じ翻訳者によるものであることから、*Shubhātīta-stava* (以下、Ss, P no. 2020) とした¹²⁾。そしてCSの4つの讃歌の順序をひとまずチベット大蔵經に収められている順にNs, Ls, As, Ssとした。作者についてはCandrakīrtiやPrajñākaramati, Advayavajraやチベット人翻訳者がナーガールジュナとしていて、ナーガールジュナ作とみている。さらに、CSの成立過程について2つの可能性を考えている。1つは、もともと独立した作品であったいくつかの讃歌が後に集められ、そのうち4つが写本に写され、そしてその写本をPrajñākaramatiが見て1つの作品と誤解した、というもの。もう1つは、もともとCSという名の1つの作品があったが、それらが個々の讃歌 (あるいは章) の名で呼ばれるうちに4つの独立した作品だと思われるようになった、というものである。

1950年代にはTucciがAmṛtākaraによる注釈書*Catuḥstava-samāsārtha*を発見し、校訂出版した¹³⁾。これにはNs, As, Psのそれぞれの名のもとにそれぞれの注釈がつけられている。写本の冒頭部分は欠落しているが、TucciはそれをLsだと推定した。TucciはこれによりCSの4つとその順序をLs, Ns, As, Psと決定した。またCSの引用に関して、*Pañcakrama*, PP, BCP, ASの4つにTucciのいうCSに含まれる偈頌の引用があることを述べ、それらの引用のうちには*catuḥstava*という記述や*ācāryapāda*作という記述を伴ったものがあることを述べている。CSの成立については、Prajñākaramati時代のインドでは1つの作品として考えられていたが、チベット人翻訳者Tshul-khrims rgyal-ba (Jayaśīla) とインド人共訳者Kṛṣṇapaṇḍitaは別々の4つの作品と考えた、としている。

酒井紫朗氏はTucciの説にもとづいてCSが L_s 、 N_s 、 As 、 Ps の四讃歌からなるものと考え、 N_s 、 Ps に関してはTucciのサンスクリット、チベット両校訂テキストを利用しての日本語訳、 L_s 、 As に関してはチベット訳のみからの日本語訳、加えてAmṛtākaraの注釈の日本語訳を発表した¹⁴⁾。氏はCSの成立について、チベット人翻訳者の時代で少なくとも1038年にはまだ‘Catuḥstava’¹⁵⁾という呼称はなく、Amṛtākaraの生存年代を考慮して13世紀のインド仏教の末期頃に‘Catuḥstava’と呼ばれていた、としている¹⁵⁾。

1980年代、Chr. LindtnerはCSとしてまとめた4つのサンスクリット写本のコピー等入手し、 L_s と As を校訂出版した¹⁶⁾。これによって L_s 、 N_s 、 As 、 Ps の校訂サンスクリットテキストが出揃った。Lindtnerは‘Catuḥstava’への最も古い言及はVairocanarakṣitaの*Bodhisattvacaryāvatāra-pañjikā* (以下、*BSP*)¹⁷⁾であるとしている。そして4つの讃歌をTucciと同様に L_s 、 N_s 、 As 、 Ps とし、その理由として1. CSとして4つの讃歌のそろったサンスクリット写本が4本存在する。2. それらの写本に示された4つの讃歌とそれらの順序がAmṛtākaraの注釈と一致する。(ただしAmṛtākaraの注釈には L_s にあたる部分が欠けている。) 3. CSに含まれる讃歌はBhavya、Candrakīrti、Śāntarakṣitaだけでなく著名でないインドの注釈者によっても引用されている、の3点を挙げる。作者については、教義 (doctrine) と形態 (style) が、特に L_s と As はMK等と一致するので、ナーガールジュナであるとしている。一方、新たな問題も浮上してきた。それは、 As 45に唯識派の三性説がみられるというものである¹⁸⁾。そしてその As 45cdは、唯識の思想がみられる*Laṅkāvatāra-sūtra*¹⁹⁾ (以下、 LS) にはほぼ同じ記述がみられる。

As 45cd: nāsti vai kalpito bhāvaḥ paratantras tu vidyate ||

LS II-191ab: nāsti vai kalpito bhāvaḥ paratantras ca vidyate |

Lindtnerはこの As の部分は LS から引用されたもので、それはまさに三性説であるとしている。そしてナーガールジュナは LS を通じて三性説を知っており、著者問題には影響しない、と述べている²⁰⁾。

P. WilliamsはLindtnerのこの出版に対して書評を書いている²¹⁾。氏は As 45の問題に関して、Lindtnerとは異なる偈頌解釈をしてナーガールジュナと LS の三性説との関わりを否定している²²⁾。ただしP. Williams自身の As 45の現代

語訳は掲載されていない。

またF. Tola and C. Dragonettiは、 As 45に関してチベット訳の読みをとって、三性説とは関係ない、としている²³⁾。

F. Tola and C. Dragonetti²⁴⁾ は今までの研究を詳細にまとめている。彼らは、4つの讃歌の構成に関して、 L_s と N_s はBCPにより確定され、 N_s 、 As 、 Ps がAmṛtākaraのCS注釈により確定されたことから、4つの讃歌は L_s 、 N_s 、 As 、 Ps であるとしている。著者については、 L_s はPPに*ācāryapāda*作とありナーガールジュナ作と考えられること、 N_s はASにナーガールジュナ作として引用されていること、 L_s 、 As はBCPでの引用のされ方がナーガールジュナ作とされているように思えること、Candrakīrtiは*Madhyamakāśāstrastuti*でナーガールジュナの著作を列挙しているが、その中に‘samstuti’²⁵⁾という名で諸讃歌が含まれていること、Chr. Lindtner (1982) で用いられている東大写本とGokhale写本には4つの讃歌ともナーガールジュナ作と明記されていること、チベット大蔵経でも4つの讃歌をそれぞれナーガールジュナ作としていること、さらに扱われている内容的にもナーガールジュナの思想の中核が述べられていること、以上によりCSの著者はナーガールジュナであるとしている。またCSの成立過程については、1. 実際にナーガールジュナによる独立した1つの作品であったが、チベット訳の際に別々に訳された、2. ナーガールジュナによるCSという独立した作品はなく、ナーガールジュナ以後でPrajñākaramatiやAmṛtākara以前に、誰かの手によりCSという名のもとに一つにまとめられた、という2つが考えられるが、ナーガールジュナによるCSという独立した作品があつたならチベット訳されないはずはなく、大蔵経に入っているはずであるし、4つの讃歌は別々に出回っており、より大きな作品の一部であるという示唆もなされていないことから、CSはもともと別の作品であつた、という2. の説をとっている。それから問題点として、Amṛtākaraの注釈の冒頭の欠落部分が L_s だという証拠はない、AmṛtākaraはCSの著者が誰か述べていない、*Dharmadhātustava*以外はナーガールジュナの讃歌は漢訳大蔵経に入っていない、ということも挙げている。

斎藤明氏も今までの研究をふまえた上で、残された問題点を指摘している²⁶⁾。1つは、なぜ L_s 、 N_s 、 As 、 Ps が後代CSと総称されるに至ったか、というも

の、2つ目に、サンスクリット写本は偈頌数、内容に関してチベット訳と若干の隔たりがみられるが、3つ目として、As45は唯識派の三性説とパラルなものであるが、それはどう説明すべきなのか、ということである。

そのほか八力広喜氏によるLsとAsの日本語訳²⁶⁾、およびLsとAsにおける思想をMKと比較して考察した研究²⁷⁾がある。前者の日本語訳は既存の校訂サンスクリットテキストからの翻訳である。後者では氏はAs45の問題の個所を「唯識三性説における遍計所執性と依他起性のもつ性質をのべているものと考えてよいであろう。」(p. 120 II. 6-8) としているが、「ナーガールジュナが三性説を知っていたという見解には、われわれも同意しかねる。」(p. 120 II. 18-20) とし、問題は未解決のままである。

これらの研究をふまえた上で、以下に問題点の整理とまとめを行う。

まず、‘Catuḥstava’ という題名の見られる個所、及びCSあるいはそれに含まれる個々の讃歌に対して著者がナーガールジュナであることを示す記述のある個所について。CSに含まれる偈頌の引用に際して ‘Catuḥstava (bstod pa bži pa)’ の記述が見られるのは、BCP²⁸⁾、BSP²⁹⁾ であり、ナーガールジュナ作という記述が見られるものはAS³⁰⁾、BD³¹⁾、CP (rje btsun gyi ḥal śha nas kyi)³²⁾、CG³³⁾、MAV (slob dpon gyi ḥal śha nas kyi)³⁴⁾、MP³⁵⁾、MU (slob dpon gyi ḥal śha nas)³⁶⁾、PP (ācāryapādaiḥ)³⁷⁾、PS (slob dpon gyi ḥal śha nas kyi)³⁸⁾、TR³⁹⁾、TS⁴⁰⁾、TV⁴¹⁾ である⁴²⁾。チベット大蔵経(デンカルマ目録、プトンの目録、P, D, N, C, S⁴³⁾) では4つの讃歌ともそれぞれナーガールジュナ作とされている。CSの注釈書であるCatuḥstava-samāsārthaには‘Catuḥstava’ という記述⁴⁴⁾ はあるが、著者に関する記述はない。また、CSとしての4つの讃歌のそろっているものとしては、Chr. Lindtner (1982) で用いられている東大写本⁴⁵⁾、モンゴル写本⁴⁶⁾、Gokhale写本⁴⁷⁾、カトマンドゥ写本⁴⁸⁾ がある⁴⁹⁾。これらのうちナーガールジュナ作という記述は東大写本(個々の讃歌に対してもCSとしてまとめたものに對してもその記述が見られる。)、Gokhale写本⁵⁰⁾ にあり、カトマンドゥ写本にはない。また ‘Catuḥstava’ という題名は、少なくとも東大写本とカトマンドゥ写本には見られない。

CSの成立過程に関する問題もまとめておく。CSの成立に関しては、次の

3つの可能性が考えられる。(3つ目のものはここで新たに加えたもの。)

1. もともと独立していた4つの讃歌が後に1つにまとめられ、CSと呼ばれるようになった。
2. もともとCSという1つの著作があったが、4つの章がそれぞれ独立したものだとして誤解され、別々に出回った。
3. もともと独立していた4つの讃歌が後にCSとしてまとめられ、ある特定の時代、あるいは特定の地域のみで知られていた。あるいは、このようにして後にまとめられたCSは1つの作品として広く認められてはいなかった。これらのうちいずれをとるべきかについては、次の3点の考察がポイントとなっている。

a. CSとして出回っていた形跡。‘Catuḥstava’ という題名が確認できる最古のものは10世紀後半から11世紀初めのPrajñākaramati⁵¹⁾ による記述で、それ以降では13世紀のAmṛtākaraによるCSの注釈書⁵²⁾ に ‘Catuḥstava’ という呼称が確認できる。その他、4つの讃歌がそろったCSのサンスクリット写本が複数存在している。(Chr. Lindtner (1982) で用いられている4本。)

b. 単独の讃歌として出回っていた形跡。現在我々が利用しているチベット大蔵経にはそれぞれ独立した作品として4つの讃歌が収められているのみで、CSとしては収められていない。Ls、Ns、Psの記出時期は11世紀⁵³⁾。Asと、Psの異訳としてĀryabhaṭṭārakamañjūsri-paramārtha-stūti (以下、Ps*, P no. 2022) が存在するが、それら2讃歌の記出時期はさらにそれ以降で12世紀前半までと推定される⁵⁴⁾。また、デンカルマ目録 (824年)⁵⁵⁾ 及びプトンの目録 (1322年)⁵⁶⁾ にもCSという著作はなく、それぞれ独立した作品として4つの讃歌が記載されている。他の文献におけるCSの引用に関しては、引用の際に典拠としてCSではなく個々の讃歌名を挙げるものが多い。引用に際して ‘Catuḥstava’ と明記しているのはBCPとBSPのみである。また、Ls単独のテキストでDhāraṇiṣaṅgrahaに混入しているものがある⁵⁷⁾。

c. 矛盾点。Prajñākaramatiの時代 (10世紀後半から11世紀初め) 及びAmṛtākaraの時代 (13世紀) に ‘Catuḥstava’ という呼称がみられるが、11世紀 (Ls, Ns, Ps) とそれ以降12世紀前半まで (As, Ps*) にチベット訳され

た際には、独立した讃歌として4つが別々に翻訳され、大蔵経に収められている。またCSの引用に際して‘Catuḥstava’⁵⁸⁾と明記しているのはインドの文献BCPとBSPのみである。

a. b. をもとに考えると、上の1. の可能性が最も高いと考えられ、ナーガルジュナの諸讃歌がPrajñākaramatiの時代あたりに一つにまとめられたと思われる。しかし、c. にあるようにチベットでの伝承に問題が残り、この点に関してはさらなる調査が必要である。

また、斎藤明氏も指摘しているように、サンスクリットテキストとチベット訳とを比較したとき、内容が一致しない箇所がある上に、偈頌数に関しても一致しない讃歌がある。

内容的に完全には一致しない偈頌を挙げると以下ようになる。

Ls-14, 18, 19, 24.

Ns-10, 11, 12, 13, 15, 16, 20.

As-9, 10, 14, 16, 18, 32, 33, 34, 35, 42, 45, 49, 56.

Ps-特になし。

Ps*-1, 6, 7, 8, 9, 10, 11.

サンスクリットテキストは存在するがチベット訳が存在しない偈頌としてはLs15, 16, As13, 25が挙げられる。また、チベット訳においてpāda数が4でない偈頌としてはLs26, As23, 53, Ps*1, 2, 10が挙げられる。それらのうちPs*1はpāda数が5で、それ以外の5偈はpāda数が3である。

また、デンカルマ目録とプトンの目録に記載されている4つの讃歌の偈頌数はNsを除いて現在我々が利用している大蔵経のものと一致していないし、デンカルマ目録では4つの讃歌の所収の順序が現在の大蔵経のものとは異なっている。そこで、CSとしての4つの讃歌と、現在の大蔵経及びそれぞれの目録で確認できる独立した4つの讃歌とを、偈頌数及び4つの順序で比較した表にしてみると次頁のようになる。

サンスクリットテキストとチベット訳のこうした諸々の相違に関しては、現在入手できるサンスクリットテキストとは異なる系統のテキストが存在する可能性も考慮しながら、今後さらに検証を進めていく必要がある。

	Ls	Ns	As	Ps	Ps*	順序
<i>Catuhstava</i> (Skt.)	28	25	59	11	(11)	Ls Ns As Ps
現在の大蔵経(11~12C)	26	25	57	11	11	Ns Ls Ps As Ps*
プトンの目録(1322)	22	25	50	10	偈頌数欠如	Ns Ls Ps As Ps*
デンカルマ目録(824)	22	25	50	10	訳出なし	As Ns Ls Ps

注) 敦煌出土チベット語文献目録⁵⁸⁾にはCSとしてまとめたものも、独立した作品としてのLs, Ns, As, Ps, Ps*も記載されていない。

3 CSテキストの再検討

ここでは、CSの注釈書等を利用して従来の校訂テキストの読み及び解釈を再検討してみたい。本稿執筆者は現在以下の2本のサンスクリット写本を用いてCSの再校訂を行っている。

・T: 東京大学図書館所蔵。No. 340, I⁵⁹⁾ Chr. Lindtner (1982) のAppendixにあるコピー、および東京大学図書館より取り寄せたマイクロフィルムを使用。CSの4つの讃歌とその注釈からなる。Newāriで書かれている。紙本。奥書によると注釈者はSiromanī、筆写を命じたのはRūparājaとされるが、彼らの年代は不詳。この写本の他にあと2つの写本が加えられて一つの写本の束になっている。Tの奥書には筆写年代は見られないが、この束の最後のfolioにはsan⁶⁰⁾ 612 (=1492年)とsamvat 693 (=1573年)と2つの年代がみられる。注釈の形式としては大部分が単語の置き換えや文法的説明で構成されており、思想的にあまり深く立ち入ったものではない。注釈名はAkāṇṭhikāとされており、4つの讃歌の名前がそれぞれの讃歌の注釈の最後に見られ、また注釈の冒頭にはkhaṇḍa-catustaye「4つの章において」という記述がある。*Catuhstava*という題名はみられない。それぞれの讃歌の作者も4つの讃歌全体の作者もNāgārjunaとされている。

T kār: Tの偈頌部分 (CSの本文部分)。

T tīk: Tの注釈部分。Akāṇṭhikā。

・W: Microfiche Edition, The Institute for Advanced Studies of World Religions, New York, film strip no. MBB-1971-93-100. 4つの讃歌のそろう

た、注釈なしの偈頌のみのテキストで、Newārīで書かれている。それぞれの讃歌の名と讃歌ごとに第一章～第四章という記述がみられる。*Catuhstava*という題名および作者に関する記述はみられない。筆写の年代は不詳。

これらはLindtnerが校訂に用いたものであるが、その校訂テキストにはTとWの読みが完全に網羅されてはいない。今回特にこの注釈部分 (T 1k) から、いくつかの新たな読み及び解釈が見つかった。Lindtnerの校訂ではこの注釈の読みあるいは解釈が明らかに反映されていない箇所がいくつかある。ちなみに注釈書 (T 1k) の校訂テキストは今までに出版されていない。以下には、これらの新たな読みあるいは解釈のうちの重要と思われるものを利用して、再校訂及び解釈の検討を行った。

まず従来の校訂サンस्क리트テキスト、つまりLsとAsに関してはChr. Lindtner (1982) のもの、Nsに関してはG. Tucci (1932) のものを挙げ、それに並べて本稿執筆者による校訂チベットテキスト (以下、Tib., 紙面の都合でヴァリアントは省略した。) を挙げた。次に問題となる個所のいくつかの異なる読みあるいは解釈を列挙し、いずれを採るべきか検討した。(Ls14とLs15に関しては再校訂ではなく偈頌解釈に関する考察である。) 再校訂あるいは解釈の検討の対象となる箇所には下線を施した。

kartā svatantraḥ karmāpi tvayōktaṃ vyavahārataḥ /
parasparāpekṣikī tu siddhis te 'bhimatānayoḥ // Ls8
byed po rañ dbañ las nīd kyañ //
tha sñad du ni khyod kyis bstan //
phan tshun bltos pa can nīd du //
grub par khyod ni bzed pa lags //

- 1) Lindtner: kartā svatantraḥ
- 2) T kār: kartā 'svatantraḥ (Ms) (T 1k: kartā...asvatantraḥ⁶¹⁾)
- 3) W: kartāsvatantraḥ

1) 「行為者は独立したものであり、行為もまた [独立したものである]、とあなたは [世間の] 言語習慣からおっしゃった。しかしこれら両者の成立は互いに依存し合ったものであると、あなたはお考えになった。」⁶²⁾

2) 「行為者は独立したのではなく、行為もまた [独立したものではない]、とあなたは [世間の] 言語習慣からおっしゃった。一方、これら両者の成立は互いに依存し合ったものであると、あなたはお考えになった。」

1) の読みはチベット訳に支持されている。しかし意味的には2) の読みの方が望ましいと思われる。このLs8の前後の偈頌をみると、「AとBはそれぞれに実体をたないが、互いに依存したものである」という形式の記述が並んでいる。Ls6ではvedānīyam (vedyam) とvedanāが互いに依存したものであり、かつそれぞれは実体をもたないもの (nirātmika-, svabhāvena nāsti) であることが述べられている。Ls7でもsaṃjñāとarthahが同じものでも異なるものでもないことが述べられており、Ls6と同様に、相互に依存したものでありながらもそれぞれは実体をもたないものであることが暗示されている。Ls9ではkarṣṇとbhokṣṛがそれぞれに 'nāsti' であることが述べられるとともに、punyamとapūnyamが縁って生じた (pratītya-samutpāda) ものであることが述べられている。またLs10ではjñeyamとvijñānamが互いに依存したものであることが述べられ、本性的には (svabhāvataḥ) 両者は存在しないことが述べられている。そして、そうした思想はLs22で簡潔にまとめられている。

yaḥ pratītya-samutpādaḥ śūnyatā sāvā te matā /
bhāvaḥ svatantra nāstīti śiṃha-nādas tavātulaḥ // Ls22

縁つてともに生じること、それは空性に他ならないと、あなたはお考えになった。それ自身に依って (独立して) 存在しているものはない、とはあなたの類い希なる獅子の叫びである。

つまりこうした文脈から、Ls8においてもkarṣṇとkarmanの実体がそれぞれに否定され、かつそれが相互に依存したものであることが述べられていると考えるのが適当だと思われる。つまりLs8のab句では実体の否定が asvatantra-という言葉を用いてなされ、そしてcd句ではそれらが互いに依存したものであると述べられているとみる。したがって2) の読みを採る。表記

の形としては 3) を採り、kartāsvatantraḥ とする。

na sataḥ sthiti-yuktasya vināśa upapadyate /
nāśato 'śva-viśāṇena samasya śamatā katham // Ls14
yod pa gnas par rigs 'gyur gyi //
'jig par 'gyur ba ma yin no //
med pa mi gnas par rigs pas //
'jig par 'gyur ba ma yin no //

- 1) Lindtner: 「存続と結びついた存在するものにとって滅は生じない。馬の角と同じように存在しないものにとって、どうして寂滅ということがあろうか。」⁶³⁾
- 2) T t̥ik: 「(ab句同上。) 馬の角と同じように存在しないものにとって、[滅は生じ] ない。どうして寂滅ということがあろうか。」⁶⁴⁾

この偈頌は、T t̥ik のおかげで正しい読みが明らかになった一例である。

1) の読みはc句の *na* が訳出できていない。一方、2) ではこの *na* はきちんと読まれている。2) の読みはチベット訳によっても支持されている。ただし、チベット訳には馬の角の喩えがないなどcd句に問題が残るが、ここではそれは扱わない。

bhāvān nārthāntaram nāśo nāpy anarthāntaram matam /
arthāntare bhaven nityo nāpy anarthāntare bhavet // Ls15

Tib.: なし

- 1) Lindtner: 「滅は存在と別のものではないし、また別のものでもないのでもない (同じものでもない) と、お考えになった。[滅が存在と] 別のものもあるとしたら、[滅は] 恒常になってしまいうし、また [滅が存在と] 別のものでもないとしたら [滅は] 生じないだろう。」⁶⁵⁾

2) F. Tola and C. Dragonetti: 「(ab句同上。) [滅が存在と] 別のものだと

したら [存在は] 恒常になってしまいうし、また [滅が存在と] 別のものではないとしたら [滅は] 存在しないだろう。」⁶⁶⁾

3) T t̥ik: 「(ab句同上。) [存在が滅と] 別のものである場合 [存在は] 恒常ではないだろうし、また [存在が滅と] 別のものでもない場合にもまた [存在は恒常では] ないだろう。」⁶⁷⁾

4) 試案: 「(ab句同上。) [滅が存在と] 別のもののだとしたら [存在は] 恒常になってしまいうし、[滅が存在と] 別のものでもないとしたら [存在は] 生じないことになってしまいう。」

ここではcd句の読みが問題となる。1) ~ 3) の読みでcd句に補われていることばを確認すると、1) ではc句で *nāśaḥ* が主語として補われ、d句でも *nāśaḥ* が主語として補われている。2) ではc句で *bhāvaḥ* が主語として、d句で *nāśaḥ* が主語として補われている。3) ではc句で *bhāvaḥ* が主語として、d句でも *bhāvaḥ* が主語として補われ、さらにd句で補語として *nityaḥ* が補われている。1) では主語 *nāśaḥ* がab句とも共通しており、形の上では自然な感じがする。2) ではcd句で主語が統一されておらず少し不自然である。3) では1)、2) の読みとはかなり異なっていて、c: *nityo* と d: *na* がc句にもd句にもかかっているとされている。ab句とcd句の構文が対称的であるのにもかかわらずab句とcd句で構文解釈の仕方が異なっており、不自然である。

さらに意味内容から1) ~ 3) の読みを吟味すると、1) ではc句の意味がおかしくd句は適切、2) ではc句、d句とも適切、3) ではc句がおかしくd句は適切である。したがって、意味内容からは2) が最も適切だと思われる。

以上2点の考察から、1) は意味内容は適切ではないけれど構文解釈としては自然であり、2) は構文解釈としては少し不自然であるけれど意味内容としては適切である。そこで1) と2) の両者を折衷した4) の読みを提案する。

4) ではcd句に共通の主語として *bhavaḥ* を補った。これはab句の主語 *nāśaḥ* とは異なるが、cd句内では統一されており、意味内容の点からも問題はないと思われる。

na gatiḥ nāgatiḥ kācid dharmāṇām iti te matiḥ /

na kvacid rāsi-bhāvo 'to 'si paramārtha-vit // Ns11

諸々の現象 (存在) は全く、去るものでもなく、やって来るものでもない、
というのがあなたのお考えである。集合体などどこにもない。だからあな
たは最高の真理を悟ったお方である。

chos rnamsgaṇ du 'aṅ 'gro 'oṅ med //

de bžin khyod kyis gsegs pa 'aṅ lags //

'ga' ru spuṅs pa 'aṅ ma lags la //

de phyir don dam rig pa 'aṅ lags //

1) Tucci : na kvacid rāsi-bhāvo 'to 'si paramārtha-vit

2) T kār : na kvacid rāsi-bhāvo 'sti ato 'si paramārtha-vit

3) W : na kvacid rāsitatto si dharmārtha- paramārtha-vit (Ms)

ślokaとしての音節数を考慮すると、1) では2音節不足し、2) と3) で
は音節の不足はなく適当である。2) はチベット訳にも支持されている。一方
3) はこのままでは読めない。従って2) の読みrāsi-bhāvo 'sti ato 'siをとる。

2) のcd句の切れ目では連声法 (sandhi) の規則が適用されず母音の連続
(hiatus) が起きているが、このように各句 (pāda) が単一とみなされるこ
とはślokaでは認められている⁶⁸⁾。CSではこの他にPs3abで-svabhāvena ut-
pādasという形が見られる。

nityo dhruvaḥ śivaḥ kāyas tava dharma-mayo jinaḥ //

vineya-jana-hetoḥ ca darśitā nirvṛtis tvayā // Ns22

あなたの身体は恒常で、永続し、寂静であり、法からなるもので、勝利者
である。そして導かれる人々のために、あなたは涅槃をお説きになった。

rtaḥ cin brtan ba 'zi ba yi //

chos kyi raṅ bžin khyod kyi sku //

rgyal bas gdul bya drol ba'i phyir //

khyod kyis mya ṅan 'das bar bstan //

1) Tucci⁶⁹⁾, T kār : jinaḥ

2) T tīk : *he jina bhagavan* 「ああ、勝利者よ、つまり世尊よ。」, *saṃbodhane*
「呼格 [の意味] で [用いられている]」⁷⁰⁾

3) W : jina

以上 jinaḥ と jina の2つの読みのうち、韻律 (meter) 上はどちらも可能。
jinaḥ とした場合、jinaḥ は a : kāyas と同格の名詞かその形容詞となるが、同格
の名詞の場合は意味的におかしくなり、また形容詞の場合も、jinaḥ が通常は
名詞として使用されることを考えると違和感がある。2) では T kār の jinaḥ を
呼格 (voc.) としているが、文法的には誤りである。そしてチベット訳では、
問題の個所は c 句に組み込まれて *rgyal bas* と訳されており、これは d : khyod
kyis と同格で、d : bstan の行為主体とされていると思われる。これらに対応す
るサンスクリットは b : jinaḥ (nom.) と d : tvayā (inst.) で格が一致せず、
訳としては問題がある。3) の読みをとれば問題ない。ただし、W では h の欠
落が頻繁に起こっていて、例えば a 句の *dhruvaḥ śivaḥ* が写本では *dhruva śiva*
となっているので、jina ḥ が欠落している可能性がある。

いずれの読みにも問題があるが、3) の読み及び2) の解釈を採って jina
「勝利者よ」とする。

jātaṃ tathāiva no jātaṃ āgataṃ gataṃ ity api //

baddho muktaṣ tathā jñāni dvayam icchen na tattva-vit // As28

de bžin skyes daṅ ma skyes daṅ //

'oṅs pa daṅ ni soṅ ba yaṅ //

de bžin bcinṣ grol ye śes la //

gnis 'dod yaṅ dag rig ma lags //

1) Lindtner : tathā jñāni

2) T kār : tathājñāni (T tīk : tathā ... ajñāni⁷¹⁾)

3) W : tathājñāni

4) Tib. : de bžin ... ye śes la (tathā jñāne?)

1) Lindtner : tat-kriyā-kartṛ kārakasya

「作り出す者（魔術師）もまた、他によって作り出されるものであり、作り出されるということを超えるものではない。あるいは、作り出す者はその（kṛtatvamの）作用の行為者だということになってしまう。」⁷³⁾

2) T ṭik : tat-kriyā kartṛ-kārakasya⁷⁴⁾

「作り出す者は他によって作り出されるものであるけれど、行為者であること（*kartṛtvam）を超えない。あるいは、[行為者以前に存在する] 行為者を作り出す者に、その（行為者の）作用が付随するのか。」

3) W : tat-kriyā-kartā kārakasya

「(ab句は1)と同じ。) あるいは、作り出す者は、その（kṛtatvamの）作用の行為者だということになってしまう。」

4) W : tat kriyā-kartā kārakasya

「(ab句は1)と同じ。) あるいは、それ（kṛtatvam）は作り出す者にとって、作用であり行為者であることになってしまう。」

5) 試案 : tat kriyā-kartṛ kārakasya

「(ab句は1)と同じ。) あるいは、それ（kṛtatvam）は作り出す者にとって、作用を行為者としてもっているということになってしまう。」

1) と 3) の読みでは-kartṛがそれぞれ中性 (n) と男性 (m) で性が異なる。1) の場合 *tat-kriyā-kartṛ* は所有複合語 (Bv.) となってそれが形容する中性主格単数名詞 (nns) を必要とする。その場合はむしろ 5) の読みをすべきである。また W では 3) と 4) の 2通りの読みの可能性が考えられる。したがって以下では 2) ～ 5) の 4つの読みを検討する。

2) の場合、T ṭik では b : *anyena* は *kartrā* とされており、この *kartrā* は *kārakaḥ* を作り出す者とされている。一方、cd句では *kartrā* を作り出す者としての *kārakaḥ* が考えられており、その *kārakaḥ* に、本来 *kartrā* のものであるべき *kriyā* (作用) が付随すると述べられている。つまり *kārakaḥ* は作り出されるものでもあり作り出す者でもある、と解釈されている。サブット訳はこの

1) 「実に同様に [ある物が] 生じたとか生じないとか、また [ある物が] 到ったとか去ったとか、[ある物が] 束縛されたとか解脱したとか、そのように知る人が2つを認める、[その人は] 真実を知らない。」⁷²⁾

2) 「実に同様に [事物が] 生じたとか生じないとか、また [事物が] 到ったとか去ったとか、同様に [人が] 束縛されたとか解脱したとか、賢明でない人は [そのような] 2つを認めるだろう。[しかし] 真実を知る人は [2つを認め] ない。」

3) 「実に同様に [事物が] 生じたとか生じないとか、また到ったとか去ったとか、同様に 解脱したとか束縛されたとか、あなたは [そのような] 2つの知識を認めるだろう。[あなたは] 真実を知る人ではない。」

4) 「同様に生じたとか生じないとか、また到ったとか去ったとか、同様に 束縛されたとか解脱したとか、知識において 2つを認めるならば、[その人は] 真実を知らない。」

1) は意味的におかしくはないがd句の解釈で *na tattva-vit* とそれ以前の部分のつながりに少し違和感がある。2) は c : *tathā* の説明が注釈にはないけれど、その点を除けば問題はない。3) では *ñānī* が中性主格単数 (nns) の形容詞で、このままでは訳出することができない。tathā jñānam と訂正すれば上に挙げたような翻訳になるし、tathājñānī と訂正すれば 1) または 2) と同じとなる。4) では 1) の *ñānī* を *jñāne* と読んでいえるように思えるが、全体としては 1) の読みに近く、記者の意訳とも考えられる。したがって読み方としては 1) と 2) の 2つが有力だと考えられるが、意味的により自然だと思われる 2) の読み、つまり *tathājñānī* を採る。

kārako 'pi kṛto 'nyena kṛtatvam nātivartate /

atha vā tat-kriyā-kartṛ kārakasya prasajyate // As34

byed pa po yañ g'zan gyis bgyis //

byas pa can du 'gyur ba lags //

yañ na de yi bya ba byed //

2) の読みに近いと思われる。ただしチベット訳の b 句はサンスクリットテキストとのズレが見られる。また、T tñk において b: *kṛtatvaṃ* (作り出されること) は *kārṭṭvaṃ kārṇatvaṃ* (行為者であること、つまり原因であること) と置き換えられており、この読みでは ab 句がうまく読めないことになる。さらに c: *atha* の注釈は *athēti praśne (atha というのは問いかけ [の意味] において [用いられている])* となっていて、*atha* をこのように読むと cd 句の意味が不明になってしまう。

3) は、*tat* が指すものが不明確であるが、それが b: *kṛtatvaṃ* を指しているのとれば「作り出す者 (kāraḥ) は [自らが] 作り出されるという作用の行為者であることにもなってしまう。」つまり、作り出す者 (kāraḥ) は自ら何かを作り出す者であるとともに、自らが自らを作り出す者になってしまう、という意味にとれる。ただ *atha vā* (あるいは) という接続詞は ab 句と cd 句をうまく結びつけていない。

4)、5) の場合、意味内容が明確ではない。

以上から、注釈に多少の混乱はみられるが、2) の読み *tat-kriyā kartṛ-kāraḥ* を採り、解釈としては「作り出す者もまた、他によって作り出されるものであり、作り出されるということを超えるものではない。あるいは、[行為者以前に存在する] 行為者を作り出す者には (にも)、その (行為者の) 作用は付随する。」とする。ただ 3) の読みも有力であり、その可能性が完全に否定されるわけではないし、4)、5) の可能性もないとは言いきれない。

この注釈書 (T) 及び W の写本からはここに挙げたもの以外にも Chr. Lindtner (1982) では報告されていない読みが多く見つかった。これらの新たな読みの中には単なる書き誤りと思われるものなども多く、重要度は以上に報告したものよりも低いと思われる、紙面の都合もあって、今回はそれらへの言及は省略した。この注釈書に関しては、CS 研究には欠くことのできない一種の工具であり、今後機会があればその校訂出版を行いたいと考えている。

注

- 1) Chr. Lindtner (1982) *Nāgārjuna: Studies in the writings and philosophy of Nāgārjuna*, Copenhagen.
- 2) L. de La Vallée Poussin (1901–1914) *Prajñākaramatī's commentary to the Bodhicaryāvatāra of Śāntideva (Bodhicaryāvatārapañjikā)*, Bibliotheca Indica, no. 983–1399, Calcutta.
- 3) L. de La Vallée Poussin (1901–1914), p. 420 l. 1, p. 488 l. 17, p. 533 l. 8 に *catustava* とでてくる。この 'catustava' という h を欠いた表記はネパール写本の特徴である。J. Brough (1954) "The language of the Buddhist Sanskrit texts", *Bulletin of the school of Oriental and African studies, University of London*, 16–2, reprint 1977, p. 360 l. 34: *Nepalese manuscripts are decidedly poor witnesses for anusvara and visarga*. de La Vallée Poussin は上記校訂本の Introduction で、中心とした写本は *the Nepalese character* からなることを述べており、これは氏の使用した写本がネパール写本であることを示している。従ってここでは、'catuḥstava' という呼称を用いる。なお、F. Tola and C. Dragonetti (1985) "Nāgārjuna's Catustava", *Journal of Indian philosophy*, 13, p. 39 note 1 では 'catustava' という表記に関して、文法的な観点からは 1. *catustava*, 2. *catuḥstava*, 3. *catustava* の 3 つが可能であることが示されている。彼らは P. Patel (1932) "Catustava", *The Indian historical quarterly*, 8, pp. 316–331, pp. 689–705; P. Patel (1934) "Catustava", *The Indian historical quarterly*, 10, pp. 82–89 の表記に従って 3. *catustava* を採用しているが、その根拠は示していない。Patel もその表記を採った根拠を上記 2 研究で示していない。
- 4) P.: チベット大蔵経北京版 (大谷目録参照)。
- 5) L. de La Vallée Poussin (1901–1914), p. 420 ll. 2–3 に *Ns* 7, p. 489 ll. 1–2 に *Ns* 9, p. 533 ll. 9–14 に *Ls* 18, 19, 20 が引用されている。また、ここでは触れられていないが、p. 573 ll. 11–13 に A: 25 に類似したものと As 36 が引用されている。CS の他文献にみられる引用については Chr. Lindtner (1982), pp. 125–127 および F. Tola and C. Dragonetti (1985), pp. 40–44 に具体的な引用箇所が示されている。
- 6) P によると *Ns*、*Ls*、*Cs*、*Ps* の訳者はいずれも、インド人学者 Kṛṣṇapāṇḍita とチベット人翻訳僧 Tshul-khrims rgyal-ba の 2 人。
- 7) L. de La Vallée Poussin (1913) "Les quatres odes de Nāgārjuna", *Le muséeon*, nouvelle série 14, pp. 1–18.
- 8) G. Tucci (1932) "Two hymns of the Catuḥstava of Nāgārjuna", *Journal of the royal Asiatic society*, 2–April, pp. 309–325.
- 9) L. de La Vallée Poussin (1903–1913) *Mūlamadhyamakakārikās de Nāgārjuna avec la Prasannapādā commentaire de Candrakīrti*, Bibliotheca Buddhica, 4, St. Pétersbourg, p. 413 l. 5 に *ācāryapādāḥ* とでてくる。それに続いて *Ls* 4 が引用されている。
- 10) M. H. Shastri (1927) *Advaya vajrasaṃgraha*, Baroda, p. 1 ll. 12–13 に *Ns* 24, p. 22 ll. 2–3 に *Ns* 21, p. 22 ll. 8–9 に *Ns* 7、また p. 22 l. 1 に *nāgārjuna-pādair* (sic) *apy uk-tam* という記述がある。
- 11) P. Patel (1934).

- 12) ナーガールジュナ の他の諸讃歌に関してPatelは、Csを、CSの他の3つの讃歌にはみられるような仏の特性に直接触れていないし、中観の理論にも触れていないことから除き、*Ps*と*Niruttara-stava* (P no. 2021)をCSの他の3つの讃歌とは構造 (construction) が違っており、仏の特性への帰敬でそれぞれの偈が終わっていることから除き、*Sattvārādhana-stava* (P no. 2017)を、CSの他の3つとは異なる韻律 (meter) で構成されていることから除いた。
- 13) G. Tucci (1956) "Catuḥstavasamāsārtha of Amṛtākara", *Minor Buddhist texts*, 1, Roma, pp. 234–246.
- 14) 酒井真典 (柴朗) (1959) 「龍樹に帰せられる讃歌 - 特に四讃について -」, 『日本仏教学会年報』, 24, pp. 1–44.
- 15) 酒井氏は酒井真典 (柴朗) (1959) のpp. 3–4において、チベット人翻訳者Jayaśīla (Tshul-khriims rgyal-ba) は「チベット仏教史上の有名なAtiśaを印度からチベットにお供して連れていった人であって、その年はWaddellによればA. D. 1038年に当たると言われているからこの頃にはいまだ此等の讃を四讃とはまとまてはいなかったようである。」また、「無譬讃の偈をAdvayavajraがAdvayavajrasaṃgrahaに引用している場合には四讃なる語を用いずnāgārjunapādair apy uktam'なる語を用いている」ことに對し、「AdvayavajraはBhattacharyaの推定によると10世紀の後半から11世紀の前半に生存した人のようであるから、この時代にはいまだかかる呼称がなかった」としている。また、TucciがG. Tucci (1956) のpp. 237 ll. 18–22において、Amṛtākaraについて、「インドで仏教が圧迫され衰微した頃チベットに逃れた、多くのPaṇḍitaのうちの一人ではないか」としていることから、「回教徒の侵入によってチベットに逃れた人と見れば大体A. D. 13世紀の中頃に生存していた人ではなかろうか。」としている。Prajñākaramatiの年代に関しては、氏はこのAmṛtākaraと同じ頃だと考えている。
- 16) Chr. Lindtner (1982).
- 17) P no. 5277, Śa169a2–3にbstod pa bži pa las kyañとあり、それに続いてNs 7が引用されている。また、Śa174b8–175a1にbstod pa bži pa las kyañ, 続いてNs 9が引用されている。しかしこれらは引用の導入文を含め、BCPがCSを引用している箇所と一致している。ので、BSPにおけるこれらの引用箇所はBCPからの孫引きであろう。ちなみにBSPには、これもBCPと引用の重複するLs 4の引用もあるが (Śa183b 3)、その引用の導入文にはde skad du yañとしかなく、これもBCPのもの (tad uktam) と類似した記述である。こうした引用の重複に関しては、江島恵教 (1966) 「『入菩提行論』の註釈文献について」、『印度学仏教学研究』, 14–2, pp. 190–194参照。いずれにしろ、VairocanaśāstraはPrajñākaramati (10世紀後半から11世紀初め、本稿注51参照) より後の11世紀半以降の人 (彼はAtiśaよりも後の人である。: G.N.Roerich (1953) *The blue annals*, 2, Calcutta, p.844参照。) だと考えられるので、Catuḥstavaへの最も古い言及はPrajñākaramatiによるBCPにおいてなされていると言えべきである。
- 18) この問題に関してはR. Gnoliがすでに指摘している。Chr. Lindtner (1982), p. 122 note 149参照。彼はTucciの校訂サンスクリットテキストに基づいてNsとPsを、チベット語に基づいてLsとAsをイタリア語訳している。R. Gnoli (1961) *Nāgārjuna: Le stanze del cammino di mezzo*, Biblioteca Boringhieri, 205, reprint Torino, 1979. 氏はAs45の

箇所はチベット訳しか見えていない点には注意が必要である。

- 19) B. Nanjio (1923) *The Laṅkāvatārasūtra*, Bibliotheca Otaniensis, 1, Kyoto.
- 20) Chr. Lindtner (1992) "The Laṅkāvatārasūtra in early Indian Madhyamaka literature", *Asiatische Studien/Études asiatiques*, 46–1, pp. 244–279, especially p. 253 ll. 12–20.
- 21) P. Williams (1984) "Review article", *Journal of Indian philosophy*, 12, pp. 73–104.
- 22) P. Williams (1984), p. 93 l. 8–p. 94 l. 13, especially p. 94 ll. 6–10: *So the only new fact derived from the discussion in the Acintyastava is that Nāgārjuna used the word 'paratantra' in connection with saṃvṛti. It doesn't follow, therefore, that these verses entail a reference to Vijñānavāda, or that Nāgārjuna knew of the Vijñānavāda.*
- 23) F. Tola and C. Dragonetti (1985), p. 49 note 191. チベット訳は: As45cd: brtags pa'i dños po med pa ŋid // gzan gyi dbaṅ ni yod ma lags // (nāsti vai kalpito bhāvaḥ paratantra na vidyate //)
- 24) F. Tola and C. Dragonetti (1985).
- 25) 斎藤明 (1986) 「龍樹作『四讃頌 (Catuḥstava)』について」, 『宗教研究』, 267, pp. 163–165.
- 26) 八力広喜 (1986) 「『超世間讃』・『不可思議讃』試訳」, 『印度哲学仏教学』, 1, pp. 72–88.
- 27) 八力広喜 (1986) 「ナーガールジュナの『四讃頌』 - 特にLokāntastavaとAcintyastava -」, 『密教文化』, 155, pp. 124–111 (横).
- 28) L. de La Vallée Poussin (1901–1914), p. 533 l. 8, p. 420 l. 1, p. 488 l. 17: 3箇所ともにcatustave (sic). BCPの校訂サンスクリットテキストはL. de La Vallée Poussin (1901–1914) を中心に使用し、P. L. Vaidya (1960) *Bodhicaryāvatāra of Śāntideva with the commentary Pañjikā of Prajñākaramati*, Buddhist Sanskrit texts, 12, Darbhanga. とS. D. Śāstri (1988) *Bodhicaryāvatāra of Ārya Śāntideva with the commentary Pañjikā of Śrī Prajñākaramati*, Baudha Bharati series, 21, Vārāṇasī. も参考にした。後者2つは、前者より多くの写本を見ているが、写本そのまゝの読み表記が欠けているように思える。
- 29) P no. 5277, Śa169a 2, Śa174b 8: 2箇所ともbstod pa bži pa las.
- 30) M. H. Shastri (1927), p. 22 l. 1: nāgārjunapādair (sic) apy uktam.
- 31) BD: Bodhimūlapradīpa-pañjikā, P no. 5344, Ki284a 5: slop dpon 'phags pa klu sgrub kyi žal nas (sic) kyañ, Ki298b 3: 'phags pa klu sgrub kyi žal nas (sic) kyañ.
- 32) CP: Caryāmelāpākāpradīpa, P no. 2668, Gi104a8.
- 33) CG: Caryāgītikośa-vṛtti, P. Kvaerne (1977) *An anthology of Buddhist Tantric songs*, reprint Bangkok, 1986, p. 190 l. 34: nāgārjunapādāḥ.
- 34) MAV: Madhyamakāvatāra-bhāṣya, L. de La Vallée Poussin (1907–1912) *Madhyamakāvatāra par Candrakīrti*, Bibliotheca Buddhica, 9, reprint Osnabrück, 1970, p. 23 l. 11.
- 35) MP: Madhyamakaratnapradīpa, P no. 5254, Tsha327a2–3: slob dpon 'phags pa klu sgrub kyi žal mīn' (sic) nas, Tsha327a 5: slob dpon 'phags pa klu sgrub ŋid kyi žal si-a nas kyañ, Tsha361a4: slob dpon ŋid kyi žal si-a nas.

- tritt in das Leben zur Erleuchtung (Bodhicaryāvatāra), München, p. 19 l. 28に11世紀、T. R. V. Murti (1955) *The central philosophy of Buddhism. A study of the Madhyamika system*, reprint London, 1960, p. 101 note 2に1078年頃、P. L. Vaidya (1960), Introduction p. 10 ll. 33-38に775-825年とある。ただしいずれにもその根拠は示されていない。年代の確定を試みた研究には田村智淳 (1971)「プラジユナ-カママティの有神論批判」、『南部仏教』, 27, pp. 1-22; 白岩顕成 (1985)「『Jitāri et Prajñākaramati』 - Jitāri の『有神論批判』」、『密教文化』, 152, pp. 96-74 (特にp. 78 l. 25: 「10世紀から11世紀にかけて活躍した学匠といえよう。」) がある。
- 52) G. Tucci (1956)にある注釈書の最後は、*Catūṣṭava-samāsārthah* (p. 246 l. 6.) とある。Amṛtākaraの生存年代については、酒井真典 (紫朝) (1959), p. 4 ll. 8-13を参照。
- 53) 羽田野伯猷 (1954)「カードム派史」、『東北大学文学部研究年報』, 5, pp. 1-105 (286-182), especially pp. 21-22によれば、チベット人翻訳者Tshul khriṃs rgyal baはNag tshoとも呼ばれ、Atiśaをインドへお供して迎え入れたチベット人翻訳官であり、Atiśaのもとで長い間学んでいる。『青史』(G. N. Roerich (1949), p. 328 ll. 15-17.)によれば、このNag tshoは1011年の生まれである。また1716年に作成されたJam dbyaṃs bṛad paによるチベット年代記には、1037年にNag-tsho lo-tśā-ba arrived to invite Jo-bo (Atiśa). (A. Chattopadhyaya (1993) *Tibetan chronological tables of 'Jam-dbyaṃs bṛad-pa and Sum-pa mkhan-po*, The Dalai Lama Tibet-Indological series, 12, Varanasi, p. 3 l. 24.) という記述がみられる。したがって、記出時期は11世紀中と推定される。
- 54) Asに関して、PとNの目録には翻訳者の名前が挙げられていないが、Dの目録及びその目録には翻訳者としてTilakaとPa tshab ṇi ma gragsの名が挙げられている。Asの翻訳者も同じ彼ら二人。P. Patel (1934), p. 89 ll. 6-11によると、Tilakalīlīlākakulīnāとも呼ばれるカシミールの学者であり、Pa tshab ṇi ma gragsはSūryakulīnāとも呼ばれるチベット人翻訳者で、彼らはKṛṣṇapaṇḍitaとTshul khriṃs rgyal baより後の時代の人々であるという。1716年に作成されたJam dbyaṃs bṛad paによるチベット年代記によると、Pa tshab ṇi ma gragsは1055年の生まれ (A. Chattopadhyaya (1993), p. 10 ll. 7-8.)。Pa tshab ṇi ma gragsの年代に関しては以下のもを参照した。K. C. Lang (1990) "sPa-tshab nyi-ma-grags and the introduction of Prāsaṅgika Madhyamaka into Tibet", *Reflections on Tibetan culture, Essays in memory of Turrell V. Wylie*, L. Epstein and R. F. Sherburne ed., Lewiston, Queenston and Lampeter, pp. 133-135; L. W. J. van der Kuip (1985) "Notes on the transmission of Nāgārjuna's *Ratnāvalī* in Tibet", *The Tibet journal*, 10-2, pp. 3-19, especially p. 4 ll. 12-14; G. N. Roerich (1949), p. 272 ll. 4-28, p. 341 l. 34-p. 343 l. 26; G. Tucci (1949) *Tibetan painted scrolls*, I, Rome, p. 99 right ll. 22-23.
- 55) M. Lalou (1953) "Les textes bouddhiques au temps du roi Khri-sroṅ-lde-bcan", *Journal asiatique*, 241, pp. 313-353, especially p. 329 ll. 13-16. この目録の成立年代は824年。(山口瑞鳳 (1978)「吐蕃王国仏教史年代考」、『成田山仏教研究所紀要』, 3, pp. 1-52, pp. 18-20を参照。) この目録に関しては御牧克己 (1987)「チベット語仏典概観」、『北村甫教授退官記念論文集チベットの言語と文化』, 冬樹社, 東京, pp. 277-314, especially p. 280 l. 12-p. 281 l. 4に簡潔にまとめられている。また、成立年代に関しては

- 36) MU: *Ratnākaraṇḍoḍghānāma-madhyamakopadeśa*, P no. 5325, A124b7.
- 37) L. de La Vallée Poussin (1903-1913), p. 413 l. 5.
- 38) PS: *Pāñcaskandhaprakaraṇa*, Chr. Lindner (1979) "Candrakīrti's Pāñcaskandhaprakaraṇa", *Acta Orientalia*, 40, pp. 87-145; p. 120 l. 26.
- 39) TR: *Tattvaratnāvalī*, 梶山雄一, 御牧克己 (1986)「昭和59・60年度科学研究費補助金 (一般研究B) 経量部 (Sautrāntika) 研究 研究成果報告書 1) The Tattvaratnāvalī of Advayaṃvājra (Tibetan text)」, p. 17 l. 8: *klu sgrub keyi 'shal sna nas kyañ*.
- 40) TS: *Tattvasiddhīnāma-prakaraṇa*, P no. 4531, Nu30b3: *slob dpon nāgārjuna'i 'shal sna nas kyañ*.
- 41) TV: *Tattvasūtrasaṃgraha*, P no. 4534, Nu105a6-7: *slob dpon klu sgrub keyi 'shal sna nas kyañ*, Nu102a 1: *'phags pa klu sgrub kyañ*.
- 42) これらのうちMUとTRにおける引用は今までの研究で言及されていない。
- 43) D: チベット大蔵経デルゲ版 (東北目録参照) ; N: チベット大蔵経ナルタン版 (壬生目録参照), 京都大学附属図書館蔵; C: チベット大蔵経チョネ版, Microfiche Edition published by the Institute for Advanced Studies of World Religions, New York; S: チベット金写テンギェル, 天津古籍出版社。
- 44) G. Tucci (1956), p. 246 l. 6: *catuṣṭava-samāsārthah*.
- 45) T: 本稿の次項3を参照。
- 46) M: 筆写年代不詳、M. Tubbianskyによって転写、校訂されたものとこと。M. Tubbianskyによるこの写本の発見の経緯についてはE. Obermiller (1937) *Prajñāpāramitāratnagomāśasamcayagāthā, Sanskrit and Tibetan text*, Indo-Iranian journal, 5, reprint (originally published by the Academy of Sciences of the USSR, Leningrad, 1937, as Volume 29 of the Bibliotheca Buddhica), p. 3でふれられている。
- 47) G: V. V. Gokhaleによって転写されたもの (handcopy)。氏によれば13世紀か14世紀のBengal scriptで書かれていること。
- 48) W: KathmanduのManavajra Vajracharya所有とのこと。次項3を参照。
- 49) これら4つの写本の読みを比較してみても最も読みの正確と思われるもの、利用価値が高いと思われるものは東大写本 (T) である。
- 50) F. Tola and C. Dragonetti (1985), p. 4 ll. 27-29.
- 51) 彼の生存年代は10世紀後半から11世紀初めと想定される。歴史書には「Canaka王」の時代の「六賢門のうちの」「南門の守護者」(『Tāranātha印度仏教史』: A. Schiefner (1868) *Tāranāthae de doctrinae buddhicae in India propagatione*, reprint Tokyo, 1963, p. 178 l. 12: *lho sgo bsrūn ba 'śes rab 'byuñ gnas blo gros ni* / ; D. Chattopadhyaya (1970) *Tāranātha's history of Buddhism in India, translated from the Tibetan by Lama Chimpā and Alaka Chattopadhyaya*, Simla, pp. 294-296.) あるいは「西門の守護者」(『青史』: G. N. Roerich (1949) *The blue annals*, 1, Calcutta, p. 206 ll. 1-4: *the six gate-keeper-paṇḍitas (of Vikramaśīla): ... at the western gate—Śes-rab 'byuñ-gnas blo-gros (Prajñākaramati)*.) という記述がある。諸研究者によって挙げられている年代は、D. Seyfort Ruegg (1981) *The literature of the Madhyamaka school of philosophy in India*, Wiesbaden, p. 116 l. 8に950-1000年頃、E. Steinellner (1981) *Śāntideva. Ein-*

836年を主張する説もあるが、それらに関しては以下の研究を参照した。原田覚 (1982) 『*Dan dkar ma* 目録考』, 『田村芳朗博士還暦記念論集仏教地理の研究』, 春秋社, 東京, pp. 607–617, 原田覚 (1982) 「吐蕃王国経史」, 『東洋学術研究』, 21–2, pp. 29–41, 原田覚 (1985) 「吐蕃経史」, 『講座敦煌六 敦煌胡語文庫』, 大東出版社, 東京, pp. 419–448, 羽田野伯猷 (1983) 「チベット流伝前期の王室仏教備考」, 『チベットインド学集』, 1, reprint 法蔵館, 京都, 1986, pp. 304–336, また以上の2つの説をめぐる論争が山口瑞鳳 (1985) 「『デンカルマ』八二四年成立説」, 『成田山仏教研究所紀要』, 9, pp. 1–61にも見られる。

56) この目録に関しては御牧克己 (1987), p. 281 l. 18–p. 282 l. 14に要領よくまとめられている。プトンによって1322年に著わされた大蔵経目録は、西岡祖秀 (1981) 「『プトン仏教史』目録部索引 II」, 『東京大学文学部文化交流研究施設紀要』, 5, pp. 43–94, especially p. 65 ll. 5–18を利用し、1362年に著わされたテンギェル（のみの）目録は、越智淳仁 (1980) 「プトンの論疏部目録」 [1] 〈礼讃部〉, 『高野山大学論叢』, 15, pp. 53–132を利用した。

57) 塚本啓祥, 松長有慶, 磯田鳳文編 (1990) 『梵語仏典の研究 III 論書篇』, 平楽寺書店, 京都, p. 140 ll. 5–14に、3本の *Dharmasāṃgraha* 写本それぞれに組み込まれたものとして、*LS* のサンスクリット写本が3本存在することが報告されている。

58) M. Lalou (1939, 1950, 1961) *Inventaire des manuscrits tibétains de Touen-houang, conservés à la Bibliothèque Nationale (Fonds Pelliot tibétain)*, 3 vols, Paris; L. de La Vallée Poussin (1962) *Catalogue of the Tibetan manuscripts from Tun-huang in the India Office Library*, London.

59) S. Matsumami (1965) *A catalogue of the Sanskrit manuscripts in the Tokyo University Library*, Tokyo, p. 122.

60) 写本では *saṃ* となっているが *saṃvat* と訂正する。

61) 校訂テキスト: (3a8) *asti / kaḥ kartṛe śvarādīḥ / kiṃ viśiṣṭaḥ / asvatantṛaḥ pṛthivy-ādi-sāmagrya-* (写本の破損) (3a9) *-dhiṇaḥ / asti / kiṃ tat karma / kiṃ viśiṣṭam / asvatantṛaṃ parivṛatam kartṛ-adhīnam /*

62) Chr. Lindtner (1982), p. 131 ll. 11–13: *That an agent is self-dependent and [his] action also is, You have [only] expressed conventionally. Actually You are convinced that both are established in mutual dependence.*

63) Chr. Lindtner (1982), p. 133 ll. 15–17: *It is not reasonable that an existent [thing which must be] connected with duration should be destroyed. [And] how can a non-existent [thing being] like the horns of a horse be extinguished?*

64) (4b7) *nōpapa-* (4b8) *dyate na saṃpadyate / ko vināśaḥ / kasya / sthiti-yuktasya sthiti-mateḥ / kiṃ viśiṣṭasya sato vidyamā-* (写本の破損) (4b9) *-nasya / nōpāpadyate / ko vināśaḥ / kasyāto 'sat-svarūpasya bandhyā-sutasyēva / kiṃ viśiṣṭasya (5a1) samasya tulasya / kena / aśva-viśāpēna ghoḷaka-śṛṅgeṇa / asti / kā śamatā śāntiḥ / kathaṃ na kathanpātī (5a2) padārthatvāt //* (14//

65) Chr. Lindtner (1982), p. 135 ll. 1–5: *Destruction is not different from the entity (bhāva), nor can it be thought of as something non-different, [for] if it were something*

other [that the entity, it] would be permanent, and it could not occur if it were something non-different [from the entity supposed to be destroyed].

66) F. Tola and C. Dragonetti (1985), p. 22 ll. 10–15: *The being destructed cannot be considered as something different from the being existent, nor as something non-different (from it). If it (=the being destructed) were different (from the being existent), it (=the being existent) would be permanent. If it (=the being destructed) were non-different (from the being existent), it (=the being destructed) would not exist.*

67) (5a3) *na bhavati / ko nāśo vināśaḥ / kiṃ arhāntaram abhāvāḥ / kasmāt / bhāvāt / vināśasya pṛthak-svarū-* (5a4) *patvāt / nāsti / ko vināśaḥ / kiṃ anarhāntaram / katham api bhāvasyēva / kathaṃ bhūtam / mataṃ saṃmatam / bhā-* (5a5) *vābhāvayor ekatvāt / na bhavati / ko bhāvāḥ / kathaṃ bhūto nityaḥ / kva sati / anarhāntare bhāve sati/ vi-* (5a6) *nāśa-saha-kāritvāt / vināśo 'bhāvāḥ / tasya samavēyatvāt / na bhavati / ko bhāvāḥ / kathaṃ bhūto nityaḥ / kva sati / anarhāntare sati / katham api //* (15//

68) M. Tokunaga (1997) *The Brhaddevatā*, Kyoto, p. xxxvii ll. 2–9; E. W. Hopkins (1901) *The great epic of India, it's character and origin*, London, p. 195 ll. 25–27. また *śloka* は *Veda* の *anuṣṭubh* から発展したものであり、*anuṣṭubh* の場合は *ab* 句、*cd* 句それぞれで一つのまとまりとみなされる。詳しくは以下を参照: A. A. Macdonell (1916) *A Vedic grammar for students*, reprint Bombay, Calcutta and Madras, 1966, pp. 436–447; L. Renou and J. Filliozat (1985) *L'Inde classique, manuel des études indiennes*, 2, Paris, p. 713 l. 43–p. 714 l. 48. なおこれらの情報には徳永宗雄氏よりご教示頂いた。先生にはこの場を借りて謝意を表したい。

69) G. Tucci (1932), p. 321 ll. 5–8: *Thy body is eternal, imperishable, auspicious. It is the very law, it is the Victorious one. Still on account of the people to be converted (to the path of salvation) Thou showedst Thy passing away into nirvāṇa.*

70) (15b7) *he jina bhagavan / mārān jayati jinaḥ / alha (15b8) śrāvaka-pratyeka-buddha-bodhisattvān janayati jino vā / tasya sambodhane tathā /*

71) (24a5) *a-* (24a6) *sti / kiṃ vastu pṛthivy-ādi-lakṣaṇam / kiṃ viśiṣṭam / ojālam anutpannam / kiṃ bhūtam / saḥ jālam utpannam api / ka-* (24a7) *tham / lathāva / pūrvoktārthavācāreṇa / nāsti / kiṃ tad vastu / kiṃ viśiṣṭam / agalam kutaścit śhāntāntaritam / nāsti / kiṃ vastu / kiṃ (24a8) vastu / kiṃ viśiṣṭam / gatam / kathaṃ kvāpi śhāntāntaram / ad-nyatvāt / nāsti / ko jano baddhaḥ / nāsti / ko jano muktaḥ / bandhābhāvā-* (24a9) *n mukter āsāra ity-arthaḥ / icched abhilaṣati / ko 'jñāni jñāna-rahito janaḥ / kiṃ dwayaṃ baddho mukta iti / necched nābhāvāccha-* (24b1) *ti / ko tattva-vit sarva-dharma-śūnyatā-darśi paññītaḥ / kiṃ etad-dwayaṃ prāg uktaṃ //* (28//

72) Chr. Lindtner (1982), p. 149 ll. 16–18: *When [someone] cognizes [something] as born or unborn, present or gone, bound or liberated [then] he maintains duality [and consequently] does not know the truth (tattva).*

73) Chr. Lindtner (1982), p. 151 ll. 15–19: *If the creator is created by another [creator], he cannot avoid being created [and, consequently, is not permanent]. Alternatively (ulha vā) [if he is created by himself] it implies that the creator is the agent of the activ-*

ity affecting himself (tatkriyā) [— which is absurd, svātmāni kriyāvirodhāt].
 74) (25b9) janyata tṣvarōḍḍattih / tan-mayaṃ nirākartum āha // asti / kaḥ / kārakāḥ / kim vi
 śiṣṭaḥ / kṛto nirmi- (26a1) taḥ / kena / anyena kartvā / katham api / nātivartate nātiśay-
 ena sarvaṃ vardata iti / kim / kartṛtvaṃ kāraṇatvaṃ / so 'pē- (26a2) śvara tṣvaraḥ karma
 -bhūtaḥ / anya-kartṛ-sambhavaratvāt / prasādyate prasaktā bhavati / kā tat-kriyā / tasyēvara-
 sya kri- (26a3) yā tat-kriyā / kasya / kartṛ-kāraḥ kasya pūrva-kartṛ-kāraḥ / anya-kartuḥ /
 evaṃ tṣvaraḥ param para-kartṛtve 'navasthiti- (26a4) ḥ / katham atha / athēti praśne /
 katham vā / vēti samuccaye // 34 //

* 本稿の校正作業中に次の文献を入手した。これには4種類の読みを利用したCSの校訂サ
 ンスクリットテキスト等が掲載されている。残念ながらこの文献の内容を本稿に反映させ
 ることはできなかった。: Gyaltzen Namdol (2001) *Caluṣṭavaḥ of Nāgārjuna* (Sanskrit
 text with Tibetan version and Hindi translation), Bibliotheca Indo-Tibetica series, 50,
 Varanasi.

(つだ あきまさ 京都大学大学院)

佛教史學研究

第44卷 第2号

〔論文〕

近世の比丘尼御所（下）——宝鏡寺を中心に——岡佳子（1）

室町幕府の追善仏事に関する一考察
——武家八講の史的展開——大田壮一郎（41）

〔書評〕

同朋大学仏教文化研究所編
『実如判五帖御文の研究』影印篇・研究篇上・研究篇下
安藤弥（69）

衆

報

〔論文〕

Catuhstava テキストの再検討
——注釈書を利用して——津田明雅（1）

佛 教 史 學 會

Vol. XLIV, No. 2

2002

THE BUKKYO SHIGAKU KENKYU

(The Journal of the History of Buddhism)

CONTENTS

Articles

OKA Yoshiko: Development of early-modern *bikuni gosho*:
the case of Hōkyō-ji — part 2 (1)

OHTA Soichiro: A Study of Memorial Services Held by the
Muromachi Shogunate: The Historical Development of
Buke Hakkou (41)

Book Review

ANDŌ Wataru: Dōhō University Buddhist
Culture Institute (ed.)
A Study of *Gōjō Ofumi* (The Epistles of Rennyo in
Five Volumes) bearing Jitsunyo's Signature (69)

Announcements

Articles

TSUDA Akimasa: Reexaminations of the text of the
Catuhstava — by consulting a commentary (1)

Published by
the Society of the History of Buddhism.
Bukkyo Shigaku-kai, Kyoto.